

予備軍含め900万人 25年は高齢者の3人に1人へ増加

SONY 静かなる再興 集中連載 第1回

明治28年11月14日第3種郵便物認可
第6819号 2018年10月13日発行
毎週土曜日発行(10月6日発売)
ISSN0918-5755

Weekly
Toyo Keizai

週刊 東洋経済

2018
10/13
定価710円

認知症と

つきあおう

最新治療から
生活費まで徹底ガイド

治療と介護の最前線
根本治療薬は開発できるのか
最新技術で早期診断

認知症の人を支える
賢く使おう「介護保険」
認知症に優しい街ランキング



介護施設はここまでできる!

認知症の人を地域社会から切り離してきた介護施設は、今大きな転換点にある。



子供たちと
認知症の人が
同じフロアで交流
銀木屋

(上)駄菓子屋の店番を務めるのは認知症の入居者たち。(左)VRコンテンツも開発(右が下河原忠道代表)

ヒ ノキの無垢のフローリング上では、近所の子供たち10人以上が宿題をしたり、ゲームに熱中したりと、それぞれ自由に時間を過ごしている。

千葉県浦安市にある、サービス付き高齢者向け住宅(サ高住)の「銀木屋」で、毎日のように繰り広げられている光景だ。子供たちの目当ては、1階フロアで開店し

ている駄菓子屋で、1カ月で50万円近く売り上げたこともあるという。店番を務めているのは、認知症の入居者たちだ。

子供たちだけではない。1階フロアは地域の人が自由に利用でき、昼時には入居者用の健康的なランチメニューを提供している。母親向けのダンススクールを開いたり、近所の大学生が寺子屋式に子供たち

ちに勉強を教えたりもする。「同じ場所にいと自然と入居者も地域の住民として溶け込んでいく」。銀木屋を運営するシルバーウッド代表の下河原忠道氏は狙いを話す。

現在10棟展開するサ高住の入居率は98%とフル稼働状態が続く。サ高住は有料老人ホームとは異なり入居一時金はかからず、月額料金も厚生年金で賄える。「要介護度や認知症の程度など、さまざまな方が集まって住むことで助け合える自由さが、サ高住の魅力」だと下河原氏

は言う。

家業は鉄鋼関連で、自身も薄型のパネルで店舗を建てる工法でビジネスを展開してきたが、2011年に介護事業に参入した。参入前に欧米などを視察し痛感したのは、高齢者を施設内に閉じ込める日本の介護施設の閉鎖性だ。

銀木屋の入居者は、程度の差はあるが大抵認知症を抱えている。リスク回避で出入りを制限する通常の施設とは異なり、鍵はかけず入居者の出入りは自由だ。

周囲の壁を取り壊し 地元住民と交流

時には道に迷って戻ってこない入居者もいるが、駄菓子屋に来ている子供たちが気づいて一緒に帰ってきたこともあり、近くのコンビニからも連絡が入る。「普段から交わっていることで、認知症の人を地域が自然に受け止めてくれている」(下河原氏)。

目下取り組んでいる新規事業が、VR(仮想現実)コンテンツの開発だ。認知症の本人の監修を受けて、幻覚など実際の認知症の症状を再現する。介護事業者の研修のほか、コンビニや自治体などからの関心も強い。「認知症の現実を体験すれば多くの誤解は解消するはずだ」。下河原氏は力を込める。